

牧場めぐり*

曾田シャロレー牧場



函館から約四〇キロの駒ヶ岳山麓に、広大な火山灰地原野を切り開いて一大肉牛基地が昭和三十九年五月に開場したソダシャロレー牧場がそれである。牧場主の曾田玄陽氏は日本畜産界に数々の功績をもたらし、今なお青年以上の情熱をもってシャロレー種牛の飼育にたずさわっておられる。

曾田氏は我国に初めて、アバーデンアンガス、ヘレフォード等の肉牛、ランドレース種豚を導入された人であり、広く世界の畜産の成果を日本にもたらしてくれた、かくしゃくたる人である。

一 曾田牧場の概況

牧場面積七五〇畝の火山灰地に現在約二七〇頭の肉牛種を飼っている一大肉牛基地であり、日本畜産界をリードするにふさわしいスケールと、事業の構想である。

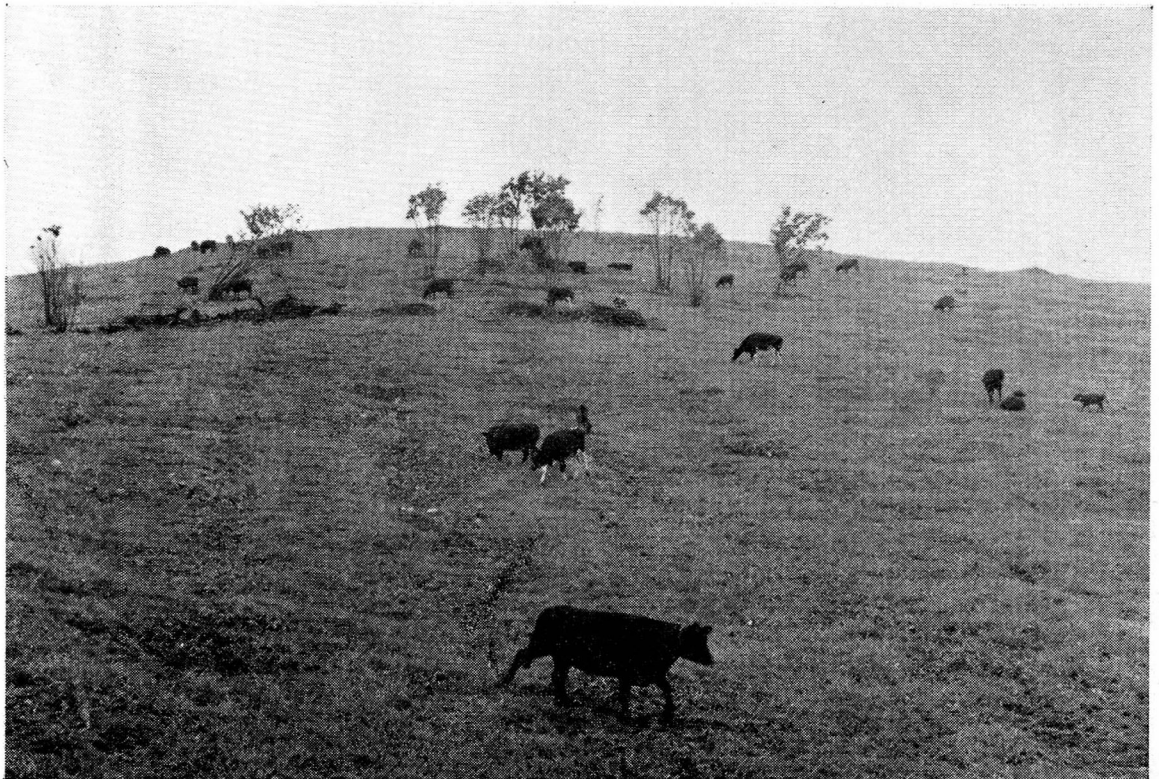
内訳は、シャロレー純粋種の雄が六頭(内種牛二頭)雌牛一七頭で、又今年中に一五頭をフランスから輸入する予定である。

その他、黒毛和種、赤毛和種、日本短角牛アバーデン、アンガス等と、シャロレー種とホルスタイン種との雑種シャロステイン種等が二五〇頭程である。

曾田氏はシャロレー種の優秀性を立証する為にあえて瘠せた火山灰地を選び、能力、遺伝力、適応性を確信し肉牛生産を行なっている。

他に豚が一〇〇頭程おり、主体はランドレースでカナダから輸入したラージブラックの種豚と繁殖豚もいる。

近々、建設中の繁殖豚舎に繁殖豚一〇〇



広大な丘陵地帯は約10度の傾斜で、昨年草地に改良されるまでは完全な雑木林であった。ここをブルドーザーで整地して、このようなりっぱな草地ができあがった。ここに肥育用若牛、繁殖用の各種の牝牛にシャロレー種雄牛をかけて放牧している。



シャロレー種雌牛。牧草地はチモシー、オーチャード、赤クロバー、白クロバーの4種混播である。

頭を入れ、頭数も一、〇〇〇頭になる。

文字通りの多角経営であり、そのステール、構想は全く日本離れているが、これらからほとんど肉資源の開発が進めば、北海道各地の原野、山麓に肉牛、乳牛が大規模に飼われる様になるだろう。

ニ シャロレー種牛の飼育

Ⅰ 歴史

シャロレー種はフランスにおける最も有力な、かつ最も古い肉牛であり一七三三年までは原産地のシャロレー地方にだけ飼われていたが、産業革命が進み内燃機関が発明されるまではシャロレー種は堅牢な骨格と強い筋肉を有していたので役畜としても大いに利用されていた。その後トラクター農業の進展と共に肉専用種として品種改良が続けられた。第一次世界大戦の終了の一九一九年にそれまでフランス各地で行なわれていた淘汰選択を一本化しシャロレー種協会が設立され現在に至っており品種の純粋性維持に努めている。

Ⅱ シャロレー種の特徴

A 標準

○被毛はクリーム白色の単色

○頭は比較的小さく、短かく、額が広い。

頬は強い。鼻は大きい。角は丸く、白く、長い。

○胸は深く肋は円く、なだらかに肩に移る。背は水平で非常に筋肉に富む。腰は非常に広く厚い。十字部はゆるやかに尻に連なり、尻と同様非常に広い。臀は多肉で良く傾斜する。

○四肢は比較的短かく、垂直であるが、細過ぎることはない。

B 環境に対する適応性

寒さに対する抵抗力があり、また白色毛と発汗作用により暑さに対しても強い。

病気に対し特に熱帯に流行するピロプラズマおよびトリパノゾーマ病に対して抵抗力がある。一方あらゆる牧野、植生に対しても馴じむのが早く肉に変える能力が、非常にすぐれている。

C 発育速度

シャロレー種は原産地における調査では粗放飼育においても出産時から三十六ヵ月までの間の一日増体重は実に雄で一・一ギ雌で〇・九四ギであり、肥育に努めれば一日一・五ギの増体も可能であるという。

D 肉質

最近の世界的傾向として、肉屋、消費者は厚い脂肪のついた肉より赤肉を好むので市場的要求にはびったりである。

風味は筋繊維の間に極めて微量に散在する脂肪のため非常に良好である。

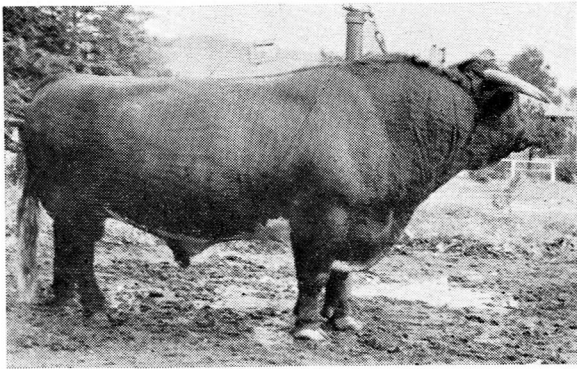
このような特質のため焼肉用の上等肉を多量に得ることができ。

三 雑種の利用

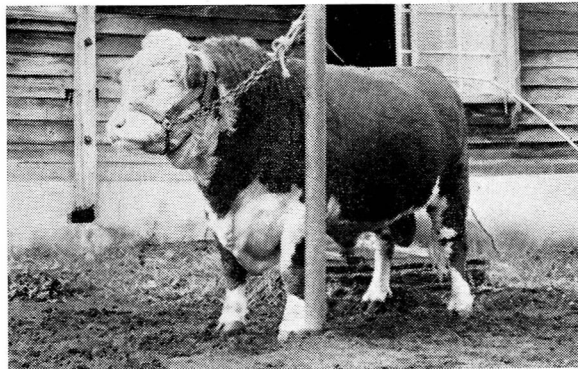
シャロレー種純粋種の急速な普及はむしろかしいが幸いシャロレー種を父とする雑種はこの雑種を作る為に用いた母の純粋種に比べて発育が早い。

第四表はアルゼンチンにおける試験成績である。

日本においても畜肉の需要が最近急激に



ショートホーン種雄牛（新得畜産試験場）



ヘレフォード種雄牛（新得畜産試験場）

- ◎優秀な家畜 五〇%
- ◎太陽と水 三〇%
- ◎テクニク 二〇%

曾田氏は一八才の時から家畜と共に三十五年間、五三才の今日まで実に二七回にもわたり、畜産関係の海外旅行をなされ、その博識、体験から生れる自信と信念は大したものである。曾田氏の、シャロレーに示す惚れこみよりは將に飼ってみなければわからないくらいである。

「アバーディンアンガス、ヘレフォード等を飼ったからシャロレーに惚れたんだ」。

数多くの種類の肉牛を飼ってみてシャロレーの優秀性を知ったのである。

畜産経営に成功するには

四 終 り に

増え牛肉の生産は到底この需要に追いつけないでいるが、酪農振興の爲にも、泌乳期にある乳牛を肉に回すべきではなく、目をつけるべきは、繁殖能力を持つ牛の利用である。素牛の購入価格が高い昨今においては、未利用資源の利用をもっと考え推しすすめるべきであろう。

曾田牧場では、既存の固定観念に捕われることなく、あらゆる種類の雑種生産を試みている。シャロレー種牛の優秀性が広く認められれば人工授精の普及した今日道南ばかりでなく、北海道の広範囲にシャロレー種雑種が飼われるようになるであろう。

同じ雑種といってもヘレフォードを和牛にかけても肉牛としての国際競争力はないと曾田氏はいきぎっている。



シャロレー種雄牛。体重は約1,100キロ、被毛は乳白色で皮膚はやわらかい。1回の精液量は12~15ccと多い。

第1表 シャロレー種の出産時から9ヵ月間の平均体重 (kg)

	生 時		3 ヲ 月		6 ヲ 月		9 ヲ 月	
	頭 数	体 重	頭 数	体 重	頭 数	体 重	頭 数	体 重
雄	895	45.2	1,021	142.9	900	243.4	310	335.8
雌	793	42.2	966	129.0	862	210.5	389	267.0

第2表 シャロレー種子牛
の出産時から36ヵ月まで
の1日増体重 (kg)

	頭 数	1日増体重
雄	826	1.111
雌	742	0.940

第3表 去勢牛と若雄牛の離乳時から20ヵ月までの体重 (kg)

月	令		8	10	12	14	16	18	20
	頭 数	体 重							
去 勢 牛	頭 数		33	30	27	22	22	22	20
	体 重		277.3	301.9	313.6	338.4	368.2	397.5	426.9
若 雄 牛	体 重		267.6	287.8	295.0	311.1	377.0	362.0	391.1
	頭 数		479	444	413	395	393	386	339

第4表 シャロレー雑種と純粋種の発育比較

父	母	頭 数	試験終了時 の 日 令	試験終了時 の 体 重 (kg)	1日増体重 (kg)	発育比較指数
C	A	7	132	194.5	1.134	119.2
A	A	6	143	167.8	0.951	100
C	S	22	166	242.4	1.204	143.6
S	S	7	157	161.0	0.831	100
C	H	2	133	196.5	1.165	123.4
H	H	3	137	167.0	0.941	100

C: シャロレー
A: アバーディン・アンガス
S: ショートホーン
H: ヘレフォード

であり

一 牛の能力を高める為の品種改良

二 飼養管理、特に草の利用度を高める。

三 未利用の牡犢、老牝牛の効果的利用。

以上を基本とした畜産でなければならぬ

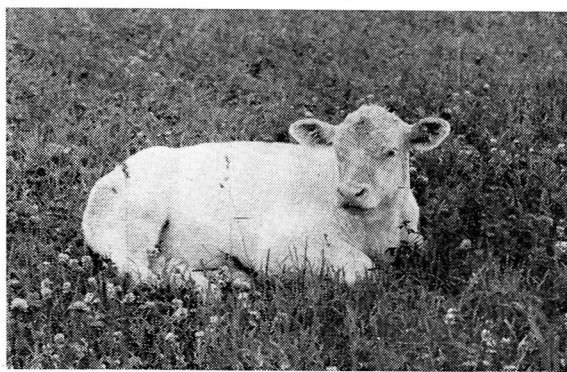
いと結ばれた。

この記事の取材にあたりあいにくの雨にもかわらず協力して下さった冒田氏をはじめ、曾田牧場の皆様の御厚意に心から御礼を申しあげさせていただきます。

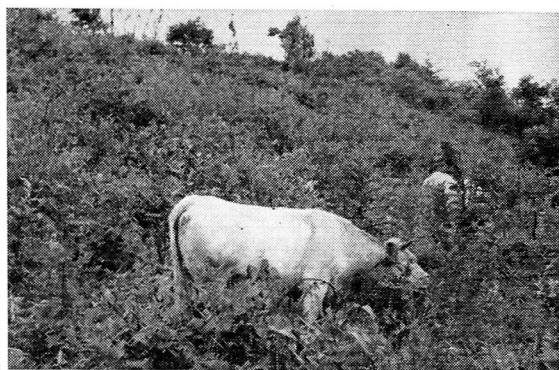
(記事取材) 上野幌畜種場 松原 守

本社編集係 秦 愛器

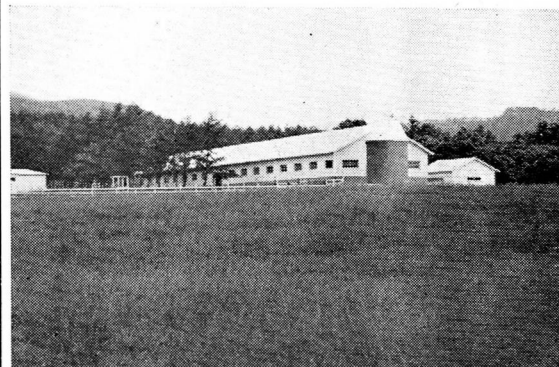
シャロレー種仔牛。尻の肉付きは非常によい。



シャロレーは雑草を肉に変える能力においてもすぐれている。



急な坂道が多く、広大な牧場なのでこのジープが活かしている。



牛舎裏の林の後方に丘陵が広がり、放牧場がある。